

第三章 明るい学園生活の源泉

第一節―スポーツ文化にも特色

バレーボール部、初出場で初優勝の快挙

上田女子短期大学のバレーボール部は、大学のバレーボール関係者だけでなく、全国の実業団の有力チームからも注目されている。そのデビューは華々しかった。

昭和五十三年五月、北信越大学バレーボール選手権大会に出場する。そして、四年制大学の並みいる強豪を破って、なんと、初出場で初優勝の栄冠に輝いたのだ。参加校は、新潟、富山、石川、福井、長野五県の四年制大学五校、短大五校の合わせて十チームだった。

バレーボール部は、五十三年に初出場、初優勝の快挙を成し遂げてから平成四年までの十五年間で、次のような成績を残している。

北信越大学バレーボール選手権大会で、春、夏合わせて優勝十八回、準優勝五回だ。全国私立短大大会は六十年から三年連続三位入賞。全日本大学女子バレーボール選手権（インカレ）はベスト

十六に二回。このほか県内の地方大会での優勝は数知れない。

これは、燦然と輝く成績である。しかも、北信越大会は、新潟、富山、金沢、福井、信州といった四年制大学が対戦相手である。最高学年が二年生という短大のハンディキャップを考えれば、まさに驚異的な記録である。このバレーボール部の優勝は、学内に感動の輪を広げていった。「バレーボール部に負けてはいられない」と。

そして、連日、体育館で気合いの入った練習を続けるバレーボール部の姿は、他のクラブの活動にも大きな影響を与えたのである。

カップを飾って活性化を図ろう

実はこの年、上田女子短期大学はじまって以来、学内に初めて優勝カップと賞状が飾られたのである。北野理事長が「この学校にはカップがないのですか」といつてから、わずか半年後のことである。それはこうだ。

あるとき北野理事長は、教職員に、「この学校にはカップも賞状も何もないのですか」と聞いた。いまでこそバレーボールの上田女子短期大学として全国に名をとどろかせているが、当時、正真正銘、学内にはカップも賞状も何ひとつなかった。

対外的な活動の証明でもあるカップや賞状が、なによりも学生を活性化する源泉になる。

北野理事長は、「スポーツで、この学校の特色をつくらうじゃないですか。バレーボールか卓球をやってはどうですか」と、もちかけた。黒岩光生助教授は自分自身のバレーボールの経験を生かすためにも、キッパリと、「では、バレーボールをやります」と、言い切った。それからハイレベルの大学バレーボールリーグへの挑戦がはじまった。

本格的なチームづくりは、大会の二ヵ月前の三月からはじめられた。選手集めから大学内でのバックアップ体制の整備、特待生制度の導入まで、いずれをとつても苦難の連続であつた。

チームができると、ただちに一日六時間から七時間の猛練習を続けた。三月にチームを結成してからの一ヵ月間は、毎日、午後四時半から九時、十時ごろまで練習した。

優勝の秘訣は入学前の体力づくり

バレーボール部のチームづくりは、毎年、三月からはじまる。高校の卒業式が終わると、まだ入学前の新一年生たちが新二年生との合同練習に参加するためにやってくる。五十六年入学の橋詰弘美さんは、入学前から合同練習に参加した一人だ。

「練習に参加するのは入学してからだと思っていましたから、春休みに練習しろといわれたとき

は、びっくりしました。練習では体力づくりのためにバーベルや腹筋をやり、苦勞した記憶がありません」

北信越大学の春季大会は五月。技術的にも精神的にも、高校と大学のバレーボールでは雲泥の差がある。二ヵ月足らずの間に、新一年生を大学バレーボールの水準までにレベルアップさせなければならぬ。新一年生を育てつつ、急ピッチでチームづくりを進めるのだ。その間の練習時間は、平日四時間、土曜日五時間だ。初出場、初優勝という輝かしい伝統というプレッシャーに潰されそうになることがある。が、「プレッシャーなんかに負けてたまるか」と、白いボールを思いっきりアタックする。こうして部員たちは鍛えあげられ、チームは着実に強くなっていくのである。

だが、全日本大学女子バレーボール選手権のベスト8に入るという目標は、いまだに達成されていない。ベスト8に進出できる日がくることを信じて、「信州のちょっと小柄な魔女たち」は、きょうも猛練習に励んでいる。

もとより、北野理事長のねらいは、大学にカップを飾ることではなかった。クラブ活動のヒーローをつくって、低迷しているクラブ活動にカツを入れることが真のねらいだった。そのねらいは、バレーボール部の活躍によってみごとに当たった。

これまで体育特待生を中心にバレーボール部は輝かしい成果を上げてきたが、部としての基礎も

できたため、平成四年、体育特待生制度を廃止し、一般学生に広く門戸を開放した。

着実にあげる日頃の成果

こうした連戦連勝のバレーボール部に刺激されて、他の運動部も華々しい戦績を残した。

バドミントン部は、昭和五十五年の第二十九回上田市民総合体育大会で女子ダブルス、女子シングルスで優勝。さらに五十六年の同大会では、高校・大学女子ダブルスの部で優勝。五十七年には、北信越大学大会の二部で優勝し、一部入替戦へコマを進めるまでになった。

「体育館で、バドミントン部とバレーボール部の人たちが仲よくネットをはさんで練習していましたね。ずいぶん一生懸命やっているなあという印象が残っています」と、五十五年度卒業の馬場秀子（旧姓母袋）さんは語る。

硬式テニス部の創部は早く、練習にも余念がなかったが、専用のテニスコートがなかったために市営コートまで出向き、各自で練習に励んでいた。

五十八年に待望のテニスコートが学内に完成するとともに、活動も活発になってきた。ここ二、三年はめきめきと力をつけ、多くの部員を擁するクラブに成長している。軽井沢、菅平での合宿を毎年行い、上田周辺の大会はもちろん、北信越大学テニス選手権に三年連続出場するなど、記録的

な成績こそ残すに至っていないが、当面はベスト4に入ることと連続出場を切らないことを目標に練習に励んでいる。

創作舞踊部は四十三年、文化祭の文化フェスティバル（上田市民会館）で、舞踊同好生が集まって「食欲」を発表したのを契機に、翌年、創作舞踊部を結成した。その年、早くも学外活動を行い、信州大学教育学部体育科主催の創作舞踊公演「心のらくがき」に賛助出演した。以来、平成三年までほぼ毎年長野市民にも鑑賞され、好評を得ている。

創作舞踊部は創部以来、「音楽と創作舞踊の会」から「クリエイティブダンス」「文化祭」などでの公演を中心に毎年着実に活動を重ね、学内の舞踊活動の中心となつて、先陣を切つて進んできている。

陸上部は六十一年、国体長野県予選で女子成年八百メートルに入賞、また、北信越学生陸上競技選手権大会四百メートルに入賞を果たし、日頃こつこつと練習をしてきた成果が花開いた。

空手道部は平成四年、国体長野県予選で成年女子型演武で優勝し国体強化選手となった。また、北信越大会で個人組手準優勝、団体準優勝。さらに全日本大学選手権大会女子団体組手で二回戦進出を果たすなど、その活躍が目立っている。

華々しい戦績こそないが、バスケットボール部、スキー部、スケート同好会、卓球部、ソフトボ

ールクラブも部員の輪を広げ、熱気に満ちている。また、女性のゴルフ熱の高まりとともにゴルフ同好会も活動をはじめている。

クラブ棟建設成る

「四十八年に上田女子短期大学として再スタートしたころは、施設はあまりよくなかった。学生たちのクラブ室は二、三室だった。とくにクラブ活動にはクラブ室はつきものだが、わずかにプレハブの二階建てがクラブ棟としてあり、そこは、華道部、ワンダーフォーゲル部、歴史研究会などが使用していた。

そこで、「あのクラブ棟では、活発なクラブ活動は無理です。クラブ棟をつくってください」と、短大側は北野理事長に要望を出した。するとまもなく「学生たちがいちばん使いやすい場所に建てなければなりませんからね」と、北野理事長は忙しいスケジュールの合間を縫って、クラブ棟建設の下見に訪れた。

キャンパスを一巡した後、クラブ棟の建設場所をあつさりと決めた。選んだ場所は体育館のすぐ裏手だった。クラブ活動で汗を拭うタオルをとりに行くのに、これ以上の場所はないと学生たちはよろこんだ。北野理事長は、以前から「運動部があるのにクラブ棟がないのはおかしい」と考えて

いた。自らキャンパスに足を運んだのも、学生への心遣いとスポーツ活動への理解の深さをあらわしている。クラブ棟は五十五年二月に完成した。

社会では、知識だけでなく、クラブ活動を通じて培われる協調性や友情、礼儀などが大切である。そして若い大学であればあるほど、学生たちに伝統のすばらしさを教え、自信もつけさせてあげたい。こうした北野理事長の教育理念を実現するための原点がクラブ棟だったのである。その思いは教授たちも同じであった。クラブ棟建設の朗報は、またたくまに学生たちに広まった。

学生たちは、やっと自分たちの居場所ができた、みんな大よろこびだった。真新しい二階建てのクラブ棟は、学生たちの希望の象徴となった。クラブ棟には、練習で汗を流した運動部の仲間や、お琴、お花など文化系クラブのメンバーの楽し気なおしゃべりと笑い声がさざめいた。

第二節―文化系クラブも活躍

地道な活動を続ける文化系クラブ

「クラブ活動が活発になれば学園は明るくなる」。これは北野理事長の信念でもある。

上田女子短期大学のスタートと同時に学生数が増え、新生学園にふさわしく、学園内は明るい雰囲気につつまれた。学生数の増加にともないクラブの数も増え、内容も充実していった。

文化系クラブには、歴史研究会、レクリエーション研究会、ボランティアクラブ、茶道部、華道部、演劇部、漫画研究会、映画研究会、文芸部、琴研究会、ワープロ・パソコン研究会、謡曲研究会などがあるが、なかでも、地域文化の向上に大きく寄与し、後世にその名が記録されるような活動をしているクラブもある。

歴史研究会による発掘調査活動は、昭和四十九年八月、上田市諏訪形の東山国有林に所在する舟窪古墳群で行われた。この発掘調査は北野理事長の発案により、上田女子短期大学の学術研究と同

時に地域文化解明事業の一環として、学術調査を本学の出費で行われた。

調査は日本考古学協会員で上田市文化財調査員をしている上田染谷丘高校小林幹男教諭の指導で、塩入秀敏顧問を中心に進められた。五基の円墳から成る群集墳の一つで一号墳と呼ばれる古墳である。古墳は高さ三・二メートル、東西八・四メートル、南北七・三メートルで、その周囲は東西十一メートル、南北十二メートルの石積みを施した方形基壇と幅四メートル、深さ七十センチの周溝と呼ばれる堀から成っている。石室は横穴式で、メノウの曲玉や水晶の切り子玉などが出土した。七世紀後半の築造と位置づけられた。

東山は大学のすぐ裏手にあり、標高約七〇〇メートルの丘陵で、この付近には三十五基の古墳が確認されている。この東信地方では最大の規模を誇る古墳群で、信濃国造の他田氏一族の墳墓とされている。この調査は翌年の二号墳発掘調査まで行われた。クラブ員の学生たちは、その後も各地の発掘調査に毎年参加している。

レクリエーション研究会は各種行事への参加をはじめ、菅平ゼミのキャンプファイアーでは他の学生をリードして楽しい会をつくりあげていった。通称レク研の代表的な活動に「手遊び」というがある。たとえば「げんこつ山のたぬきさん、おっぱい飲んでねねして……」と、歌いながら手でストーリーを表現するあの遊びだ。幼児教育には欠かせない技術である。

レクリエーション研究会の卒業生で幼稚園に勤務している持塚幸子さんは、「幼稚園では手遊びが多いんです。子供を集中させるには、歌より視覚から訴えるほうが強いから、レク研での手遊びの経験は、幼稚園に就職してもお互い教えあつたりするとき助かりました」と、その体験を語る。手遊びのレパートリーは、母から子へと代々伝えられているものから、テレビの幼児番組で紹介された最新流行の手遊びまである。また、「手遊び君」と名付けて学生たち自身がつくつたりもする。もちろん、幼児教育の道に入らなくても、母親になったときの手遊びなど効果は無限大なのである。

レクリエーション研究会はまた、地域でも絶大な人気を博している貴重なクラブの一つでもある。子供会で遊びの指導をしてくれませんか、という依頼がよくくる。

六十三年夏には、地味だが着実なレクリエーション研究活動が評価されて、全国レクリエーション大会で優良団体に選ばれるという輝かしい実績ももっている。

ボランティアクラブは、社会福祉施設などの訪問を中心に活動している。随時行っているものに上田悠生寮や小諸学舎等の訪問、春の上小地区心身障害者体育大会の補助、さらには献血運動など確実な活動が続けている。

献血運動は本学教職員、学生の協力により毎年続けられてきた。六十年九月、第十九回献血推進

長野県大会において表彰された。これはボランティアクラブの長年の努力が高く評価されたものである。

クラブ員はボランティアという実践をとおして人と助け合う喜びを学びとり、物質中心の現代社会にあって、本学在学中の二年間で得たボランティア活動の心を大切にしている。

合唱部は、その年ごとに部員数の変動はあるが、文化系クラブの一翼を常に担ってきた。最盛期には四十人を超す部員をもち、学内コンサート、大学祭コンサート、卒業記念コンサートなど、活発な部活動を展開している。

美術クラブは大学祭への出品作品の制作、学外での個展。茶道部は裏千家の先生の指導を受けながらの基礎稽古を中心に礼法の練習。華道部は、未生流の先生について週一回の研究會参加と大学祭での生花の展示を行っている。

開学以来自発的で熱心な活動を綿々と続けている演劇部は、かつて上田市民会館で公演したこともあり、いつかは大輪を咲かすエネルギーを秘めた部だといえる。

毎年、機関漫画誌『山紫水明』を発行している漫画研究会や映画研究会も大学祭に向けての活動に余念がない。

文芸部は、『かつ歩』という冊子を、また、詩の会は詩集『星の雲』を発行し、国語研究倶楽部

や日本語教育研究会もそれぞれ会誌を発行、活発な活動を続けている。

卒業生のなかには次のような声もある。

「自分たちで書いているだけじゃなくて、新聞に載るような文章を書いたり、あるいは会社に入った人が社内報にいい文章を載せたりすれば、『上田女子短期大学の国文科を出た学生はさすがだ』なんていわれるようになるかもしれないね」。卒業生のみならず、上田女子短期大学全体からの文化系クラブへの期待は大きいのである。

また、琴研究会も年々人気を集めている。六十年は琴研究会の歴史にとって忘れ難い出来事があった。アメリカ西海岸に演奏旅行に行ったのだ。これは学外から迎えている琴のお師匠さんの縁で実現したもの。渡米した約二十人の部員は、毎晩七時過ぎまで練習を続けた。これは、いまでも変わらない。

時代の進展とOA機器の普及に呼応したサークル活動として、ワープロ・パソコン研究会の活動もあげられる。最新式シンセサイザーの導入にともないサウンドサークルができ、バンドグループが相次いで生まれ、にぎやかな音楽を響かせている。

ぎつしりつまったカリキュラムの合間と放課後の時間を使つてのクラブ活動や同好会活動に、学生たちはお互いの心の触れ合いを求めて精いっぱい青春を謳歌しているのだ。

青春の絆はいつまでも

卒業生たちは、クラブ活動の思い出を次のように述べる。

五十七年度入学の文化部の柳沢克美さんは、「私は、華道部とレクリエーション研究会に入っていました。レクリエーション研究会では『手遊び』を覚えたのですが、卒業後とても役立ちました。華道部は、クラブ棟の二階の和室で稽古をしていたのですが、毎週正座するのがたいへんだったという思い出があります。華道をやっていたと思うのは、園児たちが毎日、野の草を持ってきてくれるでしょう。そのとき、ちよつと手を加えて生けられるんですね。やはり華道部で基礎を勉強していたからできるんですね。もつとも学生の頃はそんなことはまったく分からず、ただ楽しそうだから、というので入っただけなんですけどね」

五十九年度入学の高橋よし江さんは、陸上部創設のときの苦勞を語る。

「最初は六人で、一年生だけでした。走るのが好きでみんな集まったんです。正式なクラブではなかったのですが、陸連の登録費を払わなければ出場することができなかつたんですね。大学に入ったときは一〇〇メートルを十四秒で走るのがやつとでした。それが一年で一秒縮めることができたのです。うれしかったですね」

六十年入学の依田淳子さん（旧姓鈴木）は、「私たちのときは、時代のせいかわりプロ同好会など

機器を扱うサークルがだんだん目立ってきましたね。私は人数の少ないクラブに片っ端から入ったんです。そのなかでいちばん印象に残っているのが演劇部です。ステージで練習していると、そこからバレーボール部、バドミントン部、創作舞踊部などが練習しているのが見えるんです。練習はとも気合いが入っていて、先生や学生の声が体育館中に響いてくるのに刺激されて、夜遅くまで練習したことを思い出します」

そして、バレーボール部で練習に明け暮れた山浦清美さんは、「好きでやっていたんですけど、どうしても我慢できないほどつらいときがありました。『やめたい』という、まわりの友だちから、『そんなことでどうするの』と励まされました。バレーボールをやっていて、いい友だち、そして仲間を得たと思います。先輩は結婚して子供がいますけど、いまもつながりがあります」

クラブ活動は、それぞれに青春のひとときとして、いまなお彼女たちの心の奥に生きているのである。

第三節——自治会活動と学海祭

学生自治会

伝統の上田女子短期大学自治会会則第二条に、「本学は上田女子短期大学の建学の理念にのっとり、学問の自由、学園の自治のための全学生の自主的な団結により、文化・体育等にわたり、全学的及び諸部の活動を通じて、学生生活の向上、学問研究の充実、人格の陶冶を期することを目的とする」と記されている。

自治会の組織は、評議委員会、執行委員会、常任委員会に分けられている。

評議委員会は規則の改正や審査決定を行い、執行委員会は自治会活動の全てを統轄する。常任委員会は大学祭実行・運動・文化・整美、放送、交通等のそれぞれの専門的な役割を持つ委員会に分かれ、活動を行う。

入学シーズンともなると、執行委員会にとっては最も多忙な時期となる。まず会則、行事および

サークル紹介、下宿マップ、下宿生活アドバイスなどの小冊子を作成し、新入生に配布する。さらに四月から六月にかけて学生主催によるフェスティバルが続き、活動はますます活発化する。上田市内に所在する大学が催す「上田の森フェスティバル」、県下の大学があげて行う「春風高原フェスティバル」、そして長野大学と本学合同で開催する「新入生歓迎フェスティバル」などがそれぞれある。

しかし短期大学であるため、委員を引き継いで短期間に全学生を把握し活動することは、学生にとっては、たいへんな苦労がともなう。これら執行委員の努力と知恵により、上田女子短期大学の伝統が築かれているといっても過言ではない。

また、運動部と文化部は課外活動において大きな役割を果たしている。「クラブ活動に参加せずして学生生活を語れない」といわれるほど、正課外における学術、社会、芸術、スポーツに参加する経験は、豊かな人間性を育成するために重要な意味を持つ。

個性の成熟、社会性の発達は、集団活動の実践的な体験を通じて達成される。

学海祭に総力を結集して

上田女子短期大学の大学祭を「学海祭」という。いうまでもなく「塩田は信州の学海なり」から

命名されたものである。

学海祭は学生が、教職員と地域の人びとを大学に招いて日頃の学習の成果を披露する年に一度のビッグイベントである。長い準備期間から始まって後始末まで、学生たちは学海祭をおしてさまざまな体験をし、貴重な社会勉強をする。それはまさに青春のページである。

第一回学海祭は昭和四十九年十一月一日から五日にかけて開催された。このときのパンフレットに、「あらゆる面でマンネリ化しつつある大学生活のなかから、たとえ小さなことでも何かを求めて脱皮をしようと望みをもち、『ぬけだせ』というスローガンをかかげる」と、その精神を謳いあげている。

従来、「大学祭」は併設の本州大学と共催で行われていた。学校法人上田女子短期大学の誕生とともに学生自身の大学祭にのぞむ意識も大きく変わった。実行委員長アピールに「短大全学生の力によって、学海祭というひとつの物語が創りあげられようとしています。みんなで感じ、創造し、そしてみんなで楽しみ苦しむのが本当の意味の大学祭ではないでしょうか」というように、大学祭を自らの手で開催しようと張り切る決意が如実にあらわれている。これは取りも直さず、全学生の力を結集して、新しい学園づくりに向けかおうとする姿勢にほかならない。

子供の広場を実践の場に

地域に根づく大学を目指し、地域社会との交流を重視する上田女子短期大学の具体的な教育方針がうかがえるものに、第一回学海祭から今なおつづいている「子供の広場」がある。当時、教育実習を指導していた関克彦教授の発案・指導により、近隣の幼稚園や保育所の園児、小学生、福祉施設の人たちを招待して、日頃、教育実習でお世話になっているお礼の気持ちを込めて、餅つきやゲームなどで一日を楽しんでもらおうというものである。

大学の入口にかまどを造り付け、餅米をふかす。広場の中央に据えられたウスから搗きあげられていく餅に目を輝かせて見入る子供たち。それは、たいへんほほえましい光景である。

若い世代への生活文化の伝承というねらいは、みごと学海祭のなかで花開き、毎年企画のなかにすっかり組み込まれるようになった。いまでは地域の人たちにもお馴染みの催しとなり、毎年多くの人が集まり、話題になっている。

昭和六十三年度の第十五回学海祭のテーマは「己れ燃やして友照らせ」。西尾学長は素晴らしいテーマだと評して、「学園で精一杯の努力をして自己を燃えたたせ、友情に生きる。本当にたのしい。私は学生時代、禅堂で『脚下照顧』の札を見て強く心を打たれた。いま、その折の感銘を再び新たにした。『脚下照顧』は塩田に学んだ学問僧の修行に深い意味でつながっているが、このテ

「マはもつとも新しく大きい」と巻頭に寄せている。

学海祭では、学外に講師を求めて講演会が開かれるが、この年、身体障害者福祉司で県下障害者の輝ける星として活躍している平林八郎氏により、「人間とは何か」のテーマで行われた。人間とは何か、いま一度福祉の原点をみんなで考えようというものだった。

なお、第一回（昭和四十九年）は作家の早乙女勝元氏が「こどもたちにやさしさと強さを」、第二回（五十年）は評論家の羽仁説子氏で「女性として、母親として社会での生き方」、そして第十回（五十八年）は本学講師の柳沢重也氏で「欧州の社会福祉問題について」、第十四回（六十二年）はルナ子供相談所所長の岩佐京子氏による「テレビと牛乳」などの講演会が開かれている。青春のエネルギーを凝縮した学海祭は、内容も年ごとに充実の度合いを深めている。コンサート、バザー、展示、演劇、ダンスパーティー、模擬店と、各サークルやクラスがアイデアを出し、総力を結集して行われた。

六十三年はまた、新しい呼びものが登場し会場の人気をさらった。それは、日本のお祭りにつきものの和太鼓である。太鼓というものは、いったんやりだしたら病みつきになる。そんなお祭り好きな学生を中心に催しものを行えば、学海祭ももっと活発になるのではないか、というのがねらいだ。

七月の学海祭実行委員会では太鼓の演しものが確認された。九人の実行委員の有志たちは和太鼓を求めて奔走した。そのうちのひとり、私の知っているところで太鼓をやっている人がいて、その人が教えてくれると、菅平太鼓保存会のメンバーを知らせてきた。幸い、頼んだところ快く引き受けてもらった。毎週火曜日、九人の実行委員は、講義が終わってから菅平通いはじまった。夏休みには合宿もした。学海祭の一ヵ月前になると菅平通いは週二日になり、帰宅時間も夜遅くなるほど稽古に熱がこもってきた。

十一月一日、四ヵ月の練習の成果をみせてやるのだ、と九人は、中庭の特設野外ステージで力いっぱい太鼓を叩いた。『血と汗と涙の結晶、実行委員有志による和太鼓の妙技、お楽しみください』と書かれたパンフレットにひかれ、観客が集まった。演奏が終わると割れんばかりの拍手がわいた。アンコールに何度も応えた。無事に終わった安堵感にひたった。九人は二日間で三回の舞台をこなした。太鼓の響きは他の学生たちにも心地よい興奮と胸の高鳴りを感じさせた。

平成に入り、学海祭も時代の変遷とともに様変わりしてきた。従来の展示、研究発表に加えて楽しい要素の強いフェスティバル的なものになって、学生のほか、地域の人びとの多数の参加もあり、盛り上がりを見せている。

広告とりも社会勉強

学海祭のパンフレットは年々立派になっていく。企業や商店の広告も目立つようになってきた。広告とりにも歩くのも学生たちである。広告は学海祭の貴重な財源となるが、それ以上に社会勉強のよい機会であり、社会的常識を身につける絶好のチャンスである。頭を下げることを知らない学生、お願ひしますと言うのが照れくさいという学生たち、といわれるが、そんな社会体験をする良机会である。しかし、そんな学生もパンフレットが出来上がったときの喜びよりは、見ていても感動するという。

広報活動も活発に行われるようになった。全学あげての学海祭である。広く地域の人や他の大学の仲間たちが見に来てくれないと寂しいものになってしまふ。そこで学生たちは、宣伝カーを繰り出し、地域の人びとに学海祭の開催を知らせて回るのである。「恥ずかしいと言いながら、宣伝カーでのごいす嬢ぶりは決まっています。街でチラシ配りをしたとき、恥ずかしさから大人に配ることができずに、小学生に一生懸命配っている学生もいましたよ」と教員の一人は語っていた。

第四節―遠隔地の学生に寮・下宿を確保

学内に建つ紫苑寮

新しい紫苑寮が完成したのは昭和六十一年四月。場所はキャンパス内である。

鉄筋コンクリート二階建ての真新しい紫苑寮は、部屋数は十六室、各部屋に二人ずつ入るルームメイト制で定員は三十二人。校舎まで歩いて二分という距離にある。全室暖房完備で、室内にはベッド、机、椅子、衣装ダンスが備え付けられている。

遠隔地からの学生のために下宿や寮の確保にはどの大学でも苦労しているが、上田女子短期大学では、学生寮のほかに大学周辺の良心的な下宿を確保して、学生に提供し続けている。六十一年に新しい寮が完成するまでは、キャンパスから歩いて十二、三分の生島足島神社の境内にある建物を借り受けて学生寮としていた。寮の名称は同じ紫苑寮で、ここでも十六室で、二人ずつ入居していた。

寮は自治寮で、運営はすべて学生の手任されている。寮長、副寮長のほか、会計、代議員の役員を選出する。役員のなかで、もつともたいへんなのは食事係。みんなの希望を一週間分集めて献立をつくるのだが、寮生三十二人の好みをまとめるので、決まるまでがひと苦労だ。決まった献立は寮母さんに渡される。もつとも寮生に食欲不振の心配はまるでない。寮生の辞書にダイエットという言葉はないからだ。

大学側は、学生たちが安心して寮生活を送れるように、教員と学生係・厚生係の事務職員で構成される厚生学寮委員会を組織している。教員はおもに学生の生活相談を、事務職員は施設について担当している。

ある寮生的一天から

キャンパス内に住む寮生はどんな一日を送るのか。国文科二年、久保田直美さんのある一日を作文からみてみると。

A M 8・10。私の一日が始まる。でも始業の8・50にはしっかり教室に滑り込んでいた（寮生は二分もあれば学校へ行けるのよ）。

朝から厳しい講義。3、4時限目の「ワープロ実務」はなんなくこなし、寮へ帰ってうれしなお

屋。5、6時限の空き時間には涼しい寮でお昼寝をと思ったけど、あさって好きな「近世国文学演習」があるから下調べをしないと。

図書館で資料を見つけ、ついでに『歴史をさわがせた女たち 外国篇』を借りた。7、8時限の「言語学Ⅰ」はひたすらノートをとった。校内は涼しいが外は暑そう。9時限目は図書館司書課程の講義を受け、帰寮。夕食は寮母さん手づくりのちらしずし。フルーツサラダもおいしい。

まだ六時。「日曜日には軽井沢の高輪美術館へ行こう。ついでに高原文庫で堀辰雄展も」と、おしゃべりにはずみがつき、仲間がふえる。

お風呂、掃除をすませ、十時には全員食堂に集り夜礼。その後、自室でまた、日曜日の相談、試験対策、就職関係の情報交換と、夜はなかなか終わらない……。

「短大生専用」の下宿

寮に入れなかった学生たちは、大学が斡旋する下宿に入る。大学が下宿確保でいちばん苦労したのは五十八年、国文科の増設にともなって、学生が一気に増えたときである。下宿の数がとにかく足りなくて、係の職員は大学の近所で住宅を新築する家があると聞くと出かけて行き、下宿用の部屋もつくっていただくようお願いして回った。

その後、徐々に地元にも下宿専用の建物が新築されるようになったが、それを上田女子短期大学学生の専用下宿として他校の学生は入れないように頼んだ。その代わり学生を安定的に斡旋することにした。それが定着して現在に続いている。

専用下宿はもちろん、下宿のほとんどには権利金、敷金などはない。厚生学寮委員会は全下宿共通の「入居心得」を定め、大家さんにも協力してもらって、規則正しい下宿生活を送れるよう配慮している。さらに、年数回、下宿の学生代表と厚生学寮委員との話し合いが行われる。双方が問題点、要望を話し合い、改善に努めている。また、年に一回、大学側と大家さんとの話し合いもたれる。席上お互いに希望を出し合い、より良い下宿生活づくりのために知恵をしぼっている。

下宿は一カ所に平均五人から十人のところが多く、部屋は個室でも食事は共同で炊事することもあり、お互いに料理づくりを教えあったりするので、上達も早くレパートリーも広がるといって、学生たちは自分自身の成長ぶりに驚いている。

下宿の多くでは、時代に合わせてどんどん住みやすく改善されている。そこには、損得抜きで上田女子短期大学の学生のことを考えてくれる、地域の人びとの優しい愛情がある。

